

ウォーターフロントプロムナードの空間形態の構築に関する研究*

A Study on a Construction of Space Form of Waterfront promenade*

竹本圭介**・横内憲久***・岡田智秀***

By Keisuke TAKEMOTO**・Norihiisa YOKOUCHI***・Tomohide OKADA***

1. 研究目的

わが国のウォーターフロント開発は、生活環境の質的向上を目的の一つとしており⁽¹⁾、その具現化のために、建物と水域の間に線形の歩行路(以下、「歩行空間」)を敷設する整備が各地で進められている。この「歩行空間」を単に通過のためではなく、生活環境の質的向上のための空間として利用を促すのであれば、建物と水域の魅力を同時に享受できる高質な空間を構築することが重要になる。しかし、わが国の「歩行空間」ではこれまで指摘⁽²⁾されてきたように、パーペメントの色彩やベンチ・植栽等の配置といった表層的なデザインに主眼を置いた整備が多く、必ずしも上述した空間の高質化は図られていないのが現状と思われる。

一方、高質な歩行空間の代表とされる西欧のプロムナードは、都市施設や自然というプロムナードの周辺要素の魅力を取り込むことで空間を高質化する⁽³⁾とされている。したがって、わが国の「歩行空間」の現状として歩行が促されていないとすれば、プロムナードに代表されるような西欧の高質な歩行空間にみられる周辺要素との関わりを規範とし、歩行することによって周辺の魅力が享受できる空間整備を図るべきと考える。

そこで本研究では、わが国の「歩行空間」の現状として、利用実態やそれから得られる空間的意味等(空間特性)を捉えとともに、歩行を通じて周辺空間の魅力を享受させることで著名な西欧の歩行空間の特性を把握し、それらを通じて、わが国の「歩行空間」を高質化(プロムナード化)させる要件(規範とすべき西欧の要素)を明らかにすることを目的とする。

なお、本研究では線形の歩行空間において歩行を促す空間形態を明らかにしたいことから、その先進事例である西欧の様々な歩行空間を分析することになるが、本論ではそうした歩行空間の総称として、わが国のウォーターフロント開発で馴染まれている“プロムナード”という呼称を取り上げる。また、以下文中で“複数タイプの歩行空間”を示す場合には“プロムナード等”と称する。

2. 本研究の位置づけ

わが国の水辺空間における来訪者の行動を調査・分析した既往研究には、河川空間における来訪者の行動から滞留空間や遊歩道等の望ましい配置計画を明らかにしたもの⁽⁴⁾や、河川公園における来訪者の滞在時間に影響を与える要因を公園の規模と河川別に把握したもの⁽⁵⁾、また、河川空間での行動を分類し、それぞれの空間特性から整備例を提案したもの⁽⁶⁾などがある。しかし、これらはいずれも水辺空間の計画・設計上の留意点を抽出してはいるものの、本研究のように空間の高質化を図るべく、建物と水域の関わりから来訪者の行動特性を明らかにしたものはみられない。

また、西欧のプロムナードの空間特性を把握した既往研究には、プロムナードの空間概念を定義し、その定義に基づいてわが国の事例を類型化したもの⁽⁷⁾や、英仏を対象として水辺のプロムナードの周辺構成要素や延長距離等の特性を明らかにしたもの⁽⁸⁾がある。しかし、本研究が意図するように、わが国の「歩行空間」の利用実態を捉え、その現状を踏まえてより高質な「歩行空間」を構築するための空間要件を、その先進事例である西欧のプロムナード等の分析から導いたものはみられない。

3. 研究方法

(1) わが国の「歩行空間」における空間特性の把握方法

本研究では、わが国の「歩行空間」の空間特性を明らかにするため、「歩行空間」での利用者の行動を行動観察調査⁽⁹⁾により把握する。調査事例は、建物と水域の間に「歩行空間」が敷設されていること、歩行路の周辺に建物や水域以外の要素が少なく、「歩行空間」の空間状況(建物や水域の状況)と利用者の行動との関連性が明確に捉えやすい空間構成であることなどを踏まえ、神奈川県・横浜ベイサイドマリーナ(以下、「横浜」)と福岡県・ベイサイドプレイス博多埠頭(以下、「博多」)の2事例とする。

この調査では、「歩行空間」の利用者の多くが進入経路とする場所を調査対象進入口として、横浜ベイサイドマリーナ進入口A(以下、「横浜A」)「横浜B」「横浜C」「横浜D」、ベイサイドプレイス博多埠頭進入口A(以下、「博多A」)「博多B」の計6箇所に調査員を配置し、各進

*キーワーズ：景観、親水計画、空間整備・設計

**正員、工修、株式会社オリエンタルコンサルタンツ

(大阪府大阪市淀川区宮原3-3-31, Tel:06-6350-4373)

***正員、工博、日本大学理工学部海洋建築工学科

(千葉県船橋市習志野台7-24-1, Tel&Fax:047-469-5427)

表-1 わが国の「歩行空間」における行動観察調査

調査対象地	神奈川県横浜市金沢区・横浜ベイサイドマリーナ	福岡県福岡市博多区・ベイサイドプレイス博多埠頭
「歩行空間」名	マリーナウォーク	ベイサイドデッキ
有効サンプル数	250人	226人
調査日(天候)	2000年9月10日(日)(晴れ)・進入口C, D	2000年11月3日(金)(晴れ)・進入口A, B
調査進入口	2000年9月15日(金)(曇り)・進入口A, B	2000年11月4日(土)(晴れ)・進入口A, B
調査事例図		
調査時間帯	11:00~17:00	
調査方法	各進入口から進入した「歩行空間」の利用者に対する行動観察調査	
調査内容	各進入口に調査員を配置し、利用者に対し追跡調査を行い、下記の調査項目を調査シートに記入していく。	
調査項目	属性、滞在時間、行動軌跡、停止・着座位置、停止・着座時間、停止・着座中行為、停止・着座中の視線方向	

入口から「歩行空間」に進入した来訪者を被験者として追跡調査を開始し、調査範囲を離脱するまでの行動・行為内容や行動軌跡等を把握する(表-1)。

(2) 西欧のプロムナードにおける空間特性の把握方法

ここでは、前段で明らかにしたわが国の「歩行空間」の利用実態を踏まえ、その現状に対して、より歩行を促す高質な空間を構築したいとの観点から、歩行を通じて空間的魅力が享受できる線形の歩行空間の先進事例である西欧のプロムナード等の分析を行う。

その分析にあたっては、次のa, bの2つの事項を取り上げる。

(a) 空間的意味

プロムナードをはじめとする“歩行を促す空間”の空間的意味を把握するため、国内の辞書・辞典や国内外の百科事典等の文献⁽¹⁰⁾および既往研究等より「Promenade」およびその類似概念とされる「Alley, Avenue, Boulevard, Mall」の語意を分析するとともに、「Promenade」の利用の変遷を把握する。

(b) 空間状況

本研究では歩行を促す要素を有するプロムナード等の空間状況を捉えるにあたり、「Promenade」という語源がフランス語であること、世界的に著名なプロムナードが存在することなどからフランスを調査対象国とした。調査事例は、「地球の歩き方⑬フランス」⁽¹¹⁾の都市地図より、水域(海・河川)沿いの「Promenade」と、その類似概念である「Alley, Boulevard, Mall(遊歩道、プロムナードの一種等の意を持つ)」をプロムナード事例(以降では西欧の調査対象事例をプロムナード事例と称する)として抽出する。この分析結果としては、水域沿いのプロムナード事例は19事例得られ、そのうち海沿いのものは7事例であった。本研究では、その7事例の沿道施設の種類・

機能や配置等をガイドブックや都市地図等から把握する。

なお、本研究で対象とする、わが国のウォーターフロント開発事例と西欧のプロムナード等の事例において、空間スケールに差異があることは自明であるが、本研究が意図するところは、わが国の「歩行空間」において、西欧のプロムナードの空間形態をそのまま復元することではなく、歩行を促す空間要素やそれらの配列および空間の仕組みを捉えることにより、その空間要件(デザインポキャブラリー)をわが国の「歩行空間」で活用することを主目的としているため、特にスケールの差異が分析結果に矛盾をきたすことはないものとする。

4. わが国の「歩行空間」における空間特性の把握

(1) 「歩行空間」の魅力を生み出す空間状況

図-1~6は「横浜」「博多」の4mメッシュを用いた行動軌跡図において、利用頻度⁽¹²⁾が高い値(3~5)を示すメッシュが複数連続する領域を進入口別に示したものである。本研究では、その領域を「利用集中エリア」とし、その分布状況を考察する。また、表-2は利用者の行為内容・行動範囲を進入口別に示したものである。これらより、「歩行空間」の魅力を生み出す空間状況として、以降に示すa~cの3つの点が明らかとなった。

(a) 商業施設の参み出し

図-1~6の「利用集中エリア」は、共通して進入口に加えて、レストランや商業系建物付近に分布がみられる。これらは、建物1階壁面に大きな開口部を持ち、建物内部が見通せる場所やオープンテラス(写真-10)の前面であることから、「歩行空間」と建物の内部空間が明確に区切られず、「歩行空間」に居ながら建物内部の雰囲気やレストラン等の賑わいを感じられるためと考える。つまり、商業施設の賑わいが参み出すような建物周辺では、都市

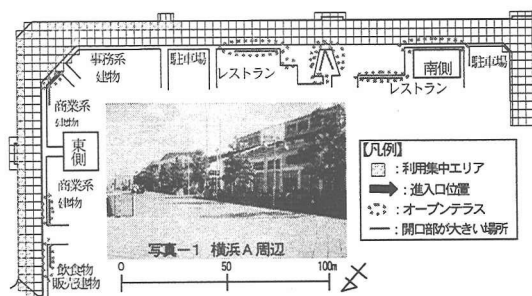


図-1 「横浜A」の利用頻度

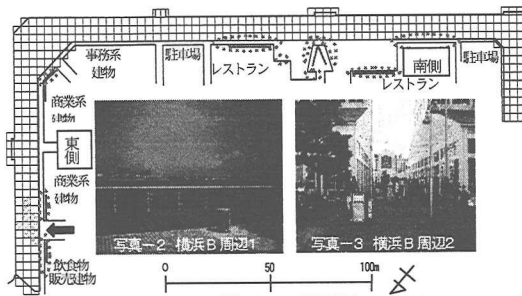


図-2 「横浜B」の利用頻度

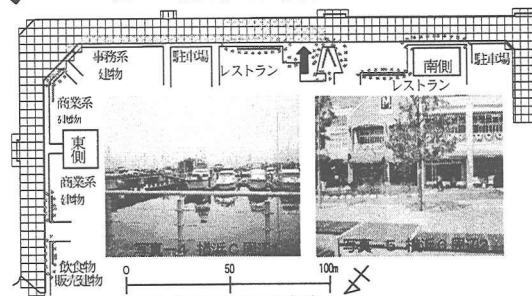


図-3 「横浜C」の利用頻度

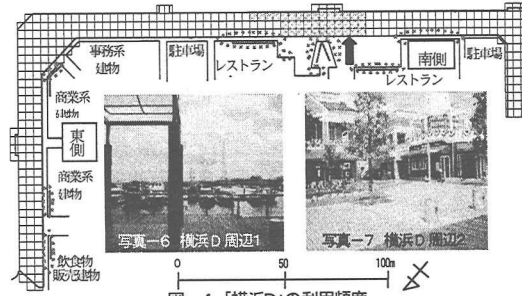


図-4 「横浜D」の利用頻度

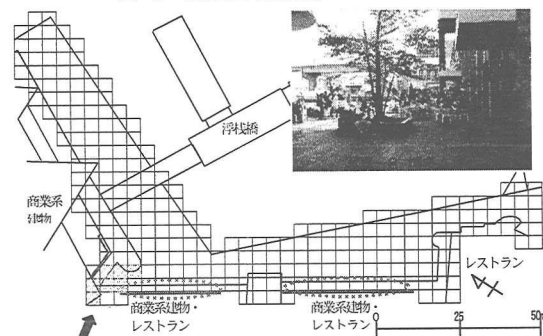


図-5 「博多A」の利用頻度

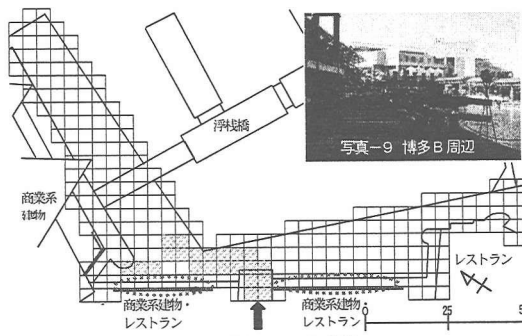


図-6 「博多B」の利用頻度

表-2 各進入口における行動の内容および行動範囲

	横浜A (27)	横浜B (100)	横浜C (36)	横浜D (87)	博多A (117)	博多B (109)
平均行動範囲 (メッシュ)	25.0 30.8 828.0	9.4 16.9 220.6	6.2 15.9 148.9	5.7 13.9 162.0	4.9 9.5 45.4	6.4 11.1 75.6
停止	行為内容 19	行為内容 62	行為内容 30	行為内容 69	行為内容 24	行為内容 31
	水面を眺める 9 (31.6) 写真を撮る 3 (11.1) 飲食をする 1 (3.7) 建物を見る 1 (3.7)	水面を眺める 37 (59.7) 水面を覗き見る 23 (37.1) 写真を撮る 10 (16.1) 飲食をする 3 (4.8) 建物を見る 1 (1.6)	水面を眺める 22 (73.3) 水面を覗き見る 14 (46.7) 写真を撮る 6 (20.0) 建物を見る 3 (10.0) 飲食をする 1 (3.3)	水面を眺める 56 (81.2) 水面を覗き見る 32 (46.4) 写真を撮る 10 (14.5) 建物を見る 7 (10.1)	水面を眺める 9 (37.5) 建物を見る 6 (25.0) 水面を覗き見る 3 (12.5) 飲食をする 2 (8.3) 写真を撮る 2 (8.3)	水面を眺める 16 (51.6) 水面を覗き見る 10 (32.3) 建物を見る 5 (16.1)
	人数(割合) 12(44.4) [N=27]	41(41.0) [N=100]	23(63.9) [N=36]	55(63.2) [N=87]	22(18.8) [N=117]	27(24.8) [N=109]
	人数(割合) 8(29.6) [N=27]	48(48.0) [N=100]	6(16.7) [N=36]	23(26.4) [N=87]	41(35.0) [N=117]	17(15.6) [N=109]
着座	行為内容 9	行為内容 54	行為内容 6	行為内容 24	行為内容 41	行為内容 19
	水面を眺める 4 (44.4) 飲食をする 1 (11.1) 建物を見る 1 (11.1)	水面を眺める 33 (61.1) 飲食をする 30 (55.6) 建物を見る 4 (7.4) 写真を撮る 2 (3.7)	水面を眺める 5 (83.3) 飲食をする 1 (16.7) 写真を撮る 1 (16.7)	水面を眺める 16 (70.4) 飲食をする 8 (33.3) 建物を見る 3 (12.5) 写真を撮る 2 (8.3)	飲食をする 26 (63.4) 水面を眺める 11 (26.8) 建物を見る 1 (2.4)	水面を眺める 18 (94.7) 飲食をする 3 (15.8) 建物を見る 1 (5.3)
	人数(割合) 8(29.6) [N=27]	48(48.0) [N=100]	6(16.7) [N=36]	23(26.4) [N=87]	41(35.0) [N=117]	17(15.6) [N=109]
	人数(割合) 10(37.0) [N=27]	29(29.0) [N=100]	10(27.8) [N=36]	18(20.7) [N=87]	60(51.3) [N=117]	71(65.1) [N=109]
移動						

注)・行動範囲の値とは、当該進入口が存在する歩行者空間の位置における水際線方向の範囲、縦とは、水際線方向に対して鉛直方向の範囲を示している。

・行動範囲の規模とは、各被験者の縦と横の範囲を乗じた値を合計し、各進入口の総被験者で除した値である。

・行為内容は、停止、着座中に歩行者空間の魅力を享受していると考えられる行為の回数を表示している。

・行為の回数は、一人の利用者が複数の行為を行った場合は全て表示している。

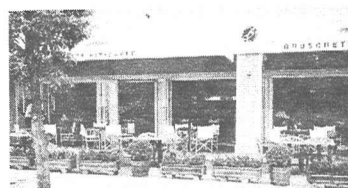


写真-10 建物内の賑わいを感じさせるオープンテラス

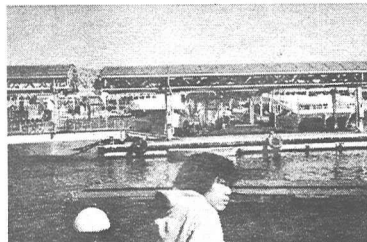


写真-11 視線を遮ること開放感を消失させる浮き桟橋

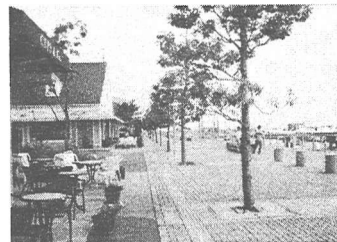


写真-12 建物と海を同様に眺められる敷地の中心部

的な雰囲気を楽しめるために利用が集中するといえよう。

(b) 水面の賑わい

図-1～4より「横浜」の水際線沿いの「利用集中エリア」は、「横浜A」では進入口から「歩行空間」の南側(以下、「南側」)まで広がり、「横浜C・D」でも進入口前面の「南側」にみられるが、「横浜B」では「南側」にみられない。これは、「横浜A・C・D」では進入口において、「南側」の前面水域で船が整然と並ぶマリーナ独特の景観や、開放的な海という水面の楽しさが視界に入るためと考える。さらに表-2をみると、「横浜C・D」では「停止」が6割であるのに対し、「横浜A・B」では4割と少ない。これは「横浜C・D」のほうが船舶群を間近で視認できることから、それだけ海の魅力を感じやすいためであろう。

一方、「博多A・B」(図-5～6)は水際線付近の「利用集中エリア」が少なく、また、表-2より「停止」の割合も2割前後と少ない。これは水域上の巨大な浮桟橋(写真-11)により、開放感を有した水域独特の景観が得にくいためと考える。以上より、開放感が確保された水面においてマリーナのような船舶群等により創出される賑わいは、水際線付近での利用を促す要因といえよう。

(c) 中心性

「利用集中エリア」において、「横浜A」(図-1)は「南側」へ広がり、「横浜C・D」(図-3・4)は進入口周辺(敷地中心部)にみられ、「博多A・B」(図-5・6)はお互いの進入口の方向に広がり、いずれも「歩行空間」の敷地中心部に向けて利用が集中していることがわかる。表-2で各進入口の「平均行動範囲」をみると、「横浜」では「南側」の進入口(「横浜C」: 148.9メッシュ、「横浜D」: 162.0メッシュ)は、「歩行空間」の東側の進入口(「横浜A」: 828.0メッシュ)に比べて狭く、「博多」では「博多A」(45.4メッシュ)が「博多B」(75.6メッシュ)に比べて狭い。これは「横浜C・D」や「博多A」は、他の進入口と比して敷地中心部に進入口があるため、「歩行空間」の広い範囲を見渡せ(写真-12)、商業施設と水面の両者の賑わいが同時に感じられるため利用が集まり、その居心地の良さから行動範囲が狭くなると考える。以上より「歩行空間」では、商業施設や水面の賑わいが同時に享受できる敷地中心部に利用が集中する状況を捉えた。

(2) わが国の「歩行空間」における空間的意味の把握

本節では、前節で明らかにした空間状況により創出される「歩行空間」の魅力を、利用者はどのような行動・行為から享受し、どのような軌跡をたどるのかを把握することより、わが国の「歩行空間」が有する空間的意味を明らかにする。

なお、ここでは「歩行空間」の形状が空間的意味に与える影響を把握するため、「歩行空間」が凸状に張り出す「横浜」と、凹状をなす「博多」を個別に分析する。

(a) 「横浜」の「歩行空間」における行動・行為内容

表-2より、最も多い行動は、「横浜A・C・D」では「停止」(「横浜A」: 44.4%、「横浜C」: 63.9%、「横浜D」: 63.2%)、「横浜B」においては「着座」(48.0%)であり、「移動」よりも滞留する行動が中心となっていることがわかる。その際の行為内容は、「横浜A」(停止)では「水面を覗き見る」(52.6%)、「横浜B・C・D」では「水面を眺める」(「横浜B」(着座): 61.1%、「横浜C」(停止): 73.3%、「横浜D」(停止): 81.2%)が最も多い。以上より、「横浜」の「歩行空間」は滞留して海の景観を楽しむ、いわゆる水辺のシーン景観を享受する場として利用されていることがわかる。

(b) 「横浜」の「歩行空間」における行動軌跡

図-7～10は、「横浜」の全利用者(250人)における各進入口の行動軌跡を、表-3は進入口別にみた退出口の利用割合を示している。

これより「横浜A」(図-7)では多くの行動軌跡が「南側」へ広がり、退出口としては表-3に示すようにEの利用割合(22.2%)が最も多いことがわかる。これは、「横浜A」では「歩行空間」に進入する際に視認できる「南側」の水域に停泊している船舶群が興味対象になるためと考える。

一方、「横浜A」以外の進入口(表-3)では、「横浜B」が退出口L(34.0%)、「横浜C」が退出口E(33.3%)、「横浜D」が退出口D(36.7%)の利用割合が最も多く、共通して進入口を退出口とし、その際の行動軌跡(図-8～10)は、進入口前面の歩行路を水際線の延長方向に対し垂直に横断する傾向がみられた。これは、「横浜B・C・D」では水域に対面しながら「歩行空間」に進入するので、その水域が最短距離で眺められる進入口前面の地先に滞留して海を眺めるためと思われる。そして、各進入口周辺の「歩行空間」においては、歩行を促すような事物が視認できないことから、進入口を退出口として背後施設に引き返すものと考えられる。

以上のことから、「横浜」の「歩行空間」は、主に滞留して水辺のシーン景観を楽しむ場として利用され、その際の行動軌跡は進入口の位置等に影響されるが、主として進入口前面の水際線沿いに滞留し、進入口を退出口として背後施設へと引き返していくことが捉えられた。こうした行動からこの空間的意味を考察すると、いわゆる「バルコニー」⁽¹³⁾での利用形態と類似しているとみなせることより、「横浜」の「歩行空間」は「ウォーターフロントのバルコニー」という空間的意味を有していると考えられる。

(c) 「博多」の「歩行空間」における行動・行為内容

表-2をみると「博多A・B」とともに「移動」(「博多A」: 51.3%、「博多B」: 65.1%)が最も多い。これより「博多」では「歩行空間」を移動経路として利用する行動が中

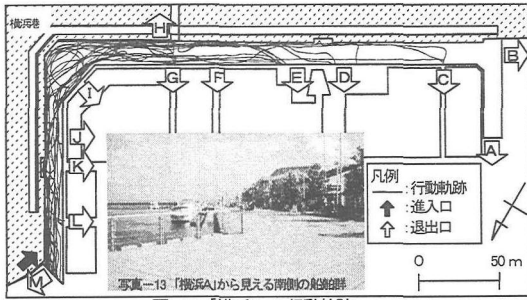


図-7 「横浜A」の行動軌跡

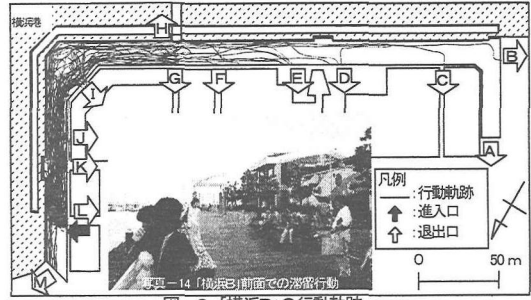


図-8 「横浜B」の行動軌跡

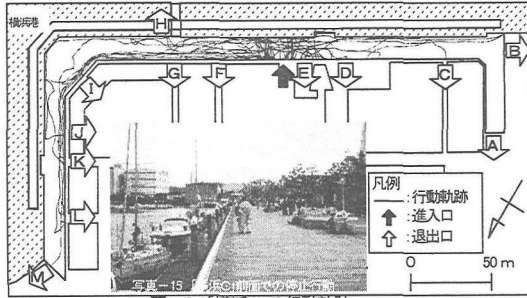


図-9 「横浜C」の行動軌跡

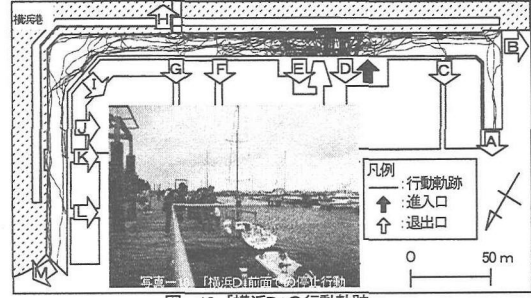


図-10 「横浜D」の行動軌跡

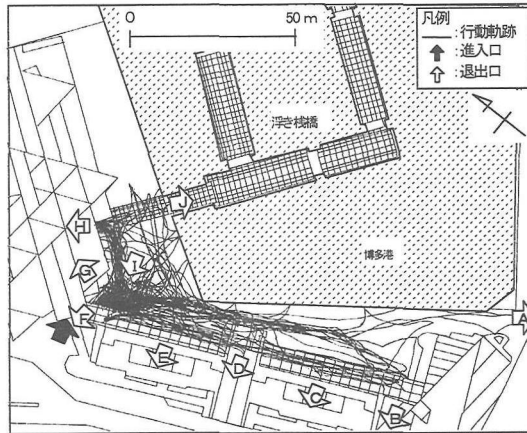


図-11 博多Aの行動軌跡

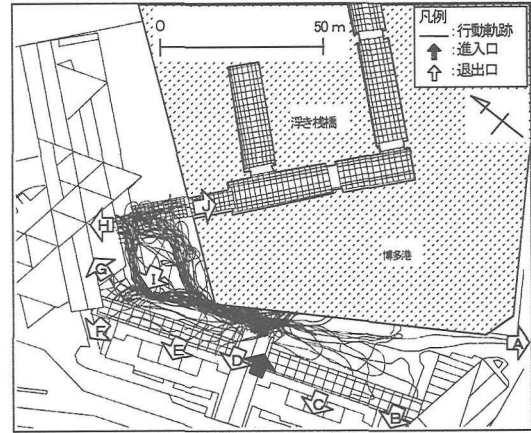


図-12 博多Bの行動軌跡

表-3 「横浜」の進入口別にみた退出口の利用割合

進入口	横浜A	横浜B	横浜C	横浜D
退出口	人数(割合)	人数(割合)	人数(割合)	人数(割合)
A	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (3.4)
B	0 (0.0)	1 (1.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
C	3 (11.1)	1 (1.0)	1 (2.8)	2 (2.3)
D	3 (11.1)	4 (4.0)	8 (22.2)	32 (36.7)
E	6 (22.2)	5 (5.0)	12 (33.3)	28 (32.2)
F	0 (0.0)	1 (1.0)	2 (5.6)	6 (6.9)
G	3 (11.1)	8 (8.0)	2 (5.6)	3 (3.4)
H	4 (14.8)	3 (3.0)	0 (0.0)	1 (1.1)
I	3 (11.1)	18 (18.0)	4 (11.1)	4 (4.6)
J	1 (3.7)	5 (5.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
K	0 (0.0)	9 (9.0)	2 (5.6)	3 (3.4)
L	4 (14.8)	34 (34.0)	4 (11.1)	2 (2.3)
M	0 (0.0)	11 (11.0)	1 (2.8)	3 (3.4)
合計	27 (100.0)	100 (100.0)	36 (100.0)	87 (100.0)

心であることがわかる。

このことから、「博多」の「歩行空間」では、「移動」が行動の中心となっていることが明らかとなった。

(d) 「博多」の「歩行空間」における行動軌跡

図-11～12 は、「博多A・B」の全利用者(226 人)にお

表-4 「博多」の進入口別にみた退出口の利用割合

進入口	博多A	博多B
退出口	人数(割合)	人数(割合)
A	3 (2.6)	2 (1.8)
B	9 (7.7)	2 (1.8)
C	4 (3.4)	2 (1.8)
D	18 (15.4)	16 (14.7)
E	5 (4.3)	10 (9.2)
F	26 (22.2)	17 (15.6)
G	11 (9.4)	6 (5.5)
H	31 (26.5)	44 (40.4)
I	6 (5.1)	5 (4.6)
J	4 (3.4)	5 (4.6)
合計	117 (100.0)	109 (100.0)

ける行動軌跡を、表-4は「博多A・B」それぞれの利用者における退出口の利用割合を示している。

表-4をみると、「博多A・B」ともに退出口Hが最も多い(「博多A」:26.5%,「博多B」:40.4%)。その際の行動軌跡は、「博多A」(図-11)は、退出口Hに向けて建

物寄りを移動している。これは、「博多A」から客船待合所や巨大な水槽を持つ「博多」の中心的施設である「C棟」に向けて、最短距離で移動しようとする行動の現れと考える。一方、「博多B」(図-12)の行動軌跡が「C棟」に向けて海沿いと建物寄りの2方向に分かれているのは、進入口が水域に近接しているため、水域越しに視野内に入る「C棟」に向かう際にも、水辺のロケーションを楽しむためといえよう。

以上より、「博多」の「歩行空間」は主要施設に向けた「移動」が行動の中心となり、狭小な範囲ながらも歩行しながら水辺のロケーションを楽しむものもみられた。このことから、「博多」の行動は、いわゆる「園路」⁽¹⁴⁾での行動と一致すると考えられ、その空間的意味は「ウォーターフロントの園路」とみなせよう。

5. 西欧のプロムナードにおける空間特性の把握

これまでわが国の「歩行空間」における空間特性を捉えてきたが、以降では、わが国の「歩行空間」を高質化させるためのプロムナードの要件を得るため、プロムナード等の空間的意味・状況を捉える。

(1) プロムナードの空間的意味

国内外の文献を分析した結果、プロムナードは「軽い運動(散歩)」「社交」などを目的として「そぞろ歩く空間」であることを捉えた。

このような目的の利用がどのような変遷をたどってきたのかをみると、プロムナードは新鮮な空気の摂取のためリゾート地などに整備され、散歩(軽い運動)に供されてきた。そのことからプロムナードがリゾート施設として名声を獲得すると、王侯貴族の来訪が増加し、貴族たちが着飾って歩く高貴な「社交」の場として利用されるとともに、周辺の施設・建物等も華やかな演出(デザイン)が施されるようになった。その後、ヴァカンスの大衆化などに伴い、様々な階層の人々に利用されるようになった結果、その空間自体の華やかな様相は保たれつつも、その利用目的は多種多様なものに変化していった⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾。

これより、プロムナードとは時代背景に即した「軽い運動」や「社交」等を目的とした歩行行為を促すことで、高質な歩行空間となることが把握できた。

(2) プロムナード等の空間状況

表-5は西欧のプロムナード等(7事例)における沿道施設の種類・機能等を、図-13~14はプロムナード等の施設配置の典型例として、ニース(Promenade des Anglais)とカンヌ(Boulevard de la Croisette)のプロムナード事例の平面構成を示している。これらより把握したプロムナード等の空間状況を以下に示す。

(a) 多様性

表-5より、プロムナード事例の沿道には25種類の施設がみられることがわかる。特に、ニースやカンヌなどの著名なプロムナード事例には10種類以上の施設がみられる。このことより、プロムナード等は沿道に多様な施設を備えることで、利用者のさまざまな利用目的に対応しているものと考えられる。

(b) 高格性

表-5をみると、プロムナード事例の沿道施設は、格調高いファサードを有する「高級ホテル」(図-14-①)が多くの事例(5事例)に共通している。そして、「高級ホテル」が存在する事例には格調高い「カジノ」が併設される場合が多い(5事例中4事例)。「高級ホテル」と「砂(礫)浜」が共存する事例も多く(5事例中3事例)、プライベートビーチを設置することで、海浜内も格調高い利用がなされている(図-14-②)。

以上のことから、プロムナード等は空間全体が格調高い雰囲気を出していることが理解できる。

(c) 劇場性

表-5より、プロムナード事例の沿道には「レストラン」も多くみられる(4事例)。その多くはオープンテラス(図-14-③)を有していることから、プロムナード等では歩行者と「レストラン」の利用者との間に視線の交流が生じるといえよう。また、「砂(礫)浜」「港」(図-14-④)も多くみられる(4事例)ことから、プロムナード等では砂浜や船舶上で憩う人々と歩行者との「見る-見られる」の関係が楽しめよう(図-15)。

つまりプロムナード等は、視線の交流が生じる舞台と観客席を併せ持つ劇場性を有していると考えられる。

(d) 端点の施設

表-5より、明確な施設を持つ端点は、14箇所中12箇所みられた。これらは、ターミナル機能を持つ「港」「ターミナル」、自然物である「公園・緑地」、文化・娯楽機能の「カジノ」などであることから、プロムナード等の端点には歩行路の起点・終点となるような明確な拠点性を持つ施設が存在することがわかる。

(e) 縦断方向の関連性

プロムナード事例には、「砂(礫)浜」(4事例)の背後に宿泊機能(高級ホテル)を有するものが多い(4事例中3事例、図-13・14)。このことから、「砂(礫)浜」において「高級ホテル」のプライベートビーチで憩う人々の賑わいと、「高級ホテル」に付随する「レストラン」の賑わいが同時に創出されるプロムナード等では、「高級ホテル」が媒介となって創出される、統一感のある「劇場性」を楽しむことができると考える。

(f) 延長方向の関連性

プロムナード事例では「砂(礫)浜」(4事例)を基調とし、その背後に宿泊機能(高級ホテル)、文化・娯楽機能(カ

表-5 フランスにおける海沿いのプロムナード事例の空間構成

地方	都市	プロムナード名	幅員 (m)	延長 距離 (m)	端点の施設		沿道施設の機能														集積の機能の合計数	
					東側	西側	沿道施設の機能															
							公園・緑地	自然物	宿泊機能	文化・娯楽機能	教育・商業機能	ターミナル機能	業務機能	その他の機能					商業			
								公園・緑地	自然物	宿泊機能	文化・娯楽機能	教育・商業機能	ターミナル機能	業務機能	研究施設	図書館	学校	病院	警察			
Cote d'Azur	Nice	Promenade des Anglais	42	8270	公園・緑地	公園・緑地	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	15		
	Cannes	Boulevard de la Croisette	30	2540	港・カジノ	港・国際会議場	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	10		
	Antibes	Promenade de la Panetière	30	350	港・ターミナル	港・ターミナル	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	4		
	Menton	Promenade du Soleil	11	1320	カジノ	カジノ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	3		
	Menton	Promenade de la Mer	11	550	大型商業施設	不明	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	5		
Provence	Monaco	Boulevard Louis II	7	580	公園・緑地	港	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	6		
	Marseille	Boulevard Charles Livon	19	810	港・池	スポーツクラブ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	10		
合計(事例数)							5	4	1	5	1	4	2	2	2	1	4	2	1	4	2	1

注1「基幹ホテル」は、3つ星以上のホテルが所在することを言う。また、「大規模商業施設」は複数の店舗が一つの敷地内に存在するものとする。

(注) 高級ホテルとは、3つ星以上のホテルが存在することを言う。また「大型商業施設」とは複数の店舗が一つの敷地内に存在するものとする。

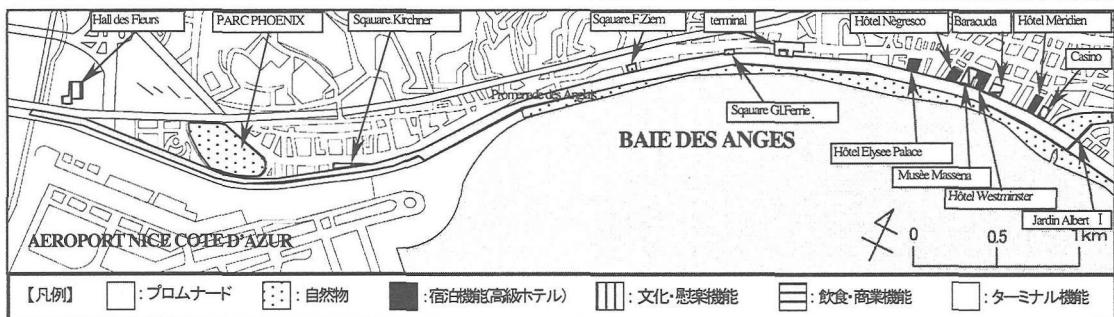
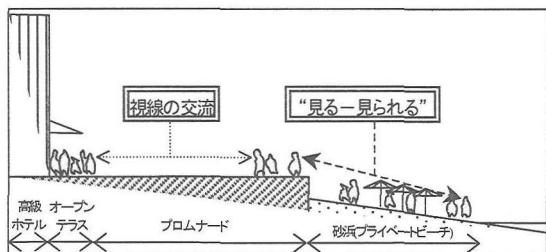


図-13 プロムナード等の施設配置の典型例: ニースのプロムナード事例(Promenade des Anglais)の平面構成



図-14 プロムナード等の施設配置の典型例: カンヌのプロムナード事例(Boulevard de la Croisette)の平面構成 (17/18/19/20)



ジノ・劇場)等の建物が集積して立ち並ぶ状況がみられる(4事例中3事例、図-13・14、図-14-⑤)。これより、プロムナード等は海浜とその背後の建物が同時に創出する「高格性」「劇場性」を延長方向に連続させることで、歩行を促すといえよう。

6. ウォーターフロントプロムナード構築の要件

本研究の結果より、わが国の「歩行空間」の空間特性は、「商業施設の滲み出し」「水面の賑わい」「中心性」という空間状況が魅力を創出し、これにより「ウォーターフロントのバルコニー・園路」という空間的意味を有することが把握できた。このことから、わが国の「歩行空間」の現状としては、建物や水域の魅力を享受できる場となっ
てはいるものの、その利用は点的なものが多くなり、線形の空間を歩行させながら魅力を享受させる場とはなっていないことが認識できた。

これに対し、西欧のプロムナード等を分析した結果、空間的意味は「軽い運動・社交等の目的でそぞろ歩く場である」というものであった。また、プロムナード等の空間状況としては、「高格性・劇場性という性質が魅力を創出する」「端点に行動の起・終点となる拠点が存在する」「縦断・延長方向で空間の統一が図られている」という空間状況から、広範な利用が促され空間の魅力を享受させていることが明らかとなった。

これらのことから、わが国の「歩行空間」において、「建物」と「海」の魅力を同時に享受させ、高質な空間(プロムナード)を創出するためには、現状の点的な利用に加え、西欧のプロムナードのような広範な利用を促し、空間利用の多様化を図ることが望ましいと考える。

以上を踏まえると、わが国のウォーターフロントプロムナードの構築にあたっては、建物(高級ブティック、レストラン等)や海(船舶群等)の格調高さとの賑わいを縦断・延長方向に連続させる(空間の統一性の確保)ことで、ウォーターフロントという場を体現させるとともに、現状のように一つの施設を中心に点的に行動させるばかりではなく、拠点となる施設を複数設置する(複数の拠点設置)ことで広範な利用を促すという2つの状況を満たす必要がある。そのことで、「歩行空間」は現状でみられる滞留しての水辺の景観享受(バルコニーの利用)や、目的地への情景を楽しみながらの移動(園路的利用)に加えて、歩行しながら格調高い雰囲気や視線の交流を楽しむ(高格性・劇場性の体感)など、「建物」と「水域」からもたらされる多様な空間利用が繰り広げられる線形の歩行
ウォーターフロントプロムナードの空間形態の構築に関する研究*

空間、すなわちウォーターフロントプロムナードの構築が図れるものと認識する。

【補注】

- (1) 文献1, p. 8
- (2) たとえば 文献2
- (3) 文献3
- (4) 文献4
- (5) 文献5
- (6) 文献6
- (7) 文献3
- (8) 文献7
- (9) 文献8, pp. 30~38
- (10) 本研究では、国立国会図書館の検索システムにて国内の土木、造園、造園工学、交通工学、都市計画系の用語辞典・辞書という語句を検索した結果に該当したものと、Britannica等の海外の著名な百科事典を用いた。
- (11) 文献9
- (12) 本研究でいう利用頻度とは、当該メッシュを通過した回数(利用回数)を各進入口における全メッシュ中の最大利用回数で除して算出した値を5段階の頻度にてはめ、頻度が高い順に5, 4, 3, 2, 1としたものである。
- (13) 建築用語辞典(文献10, p. 597)によれば、「バルコニー」とは建築物の上階の外壁もしくは内壁からはみだした床であり、また、廊下において、内壁からはみだしてつくられた観覧席であるとされている。
- (14) 土木用語辞典(文献11, p. 108)によれば、園路とは公園において入り口と主要施設を結び、散策や憩いなどを行うために設けられた遊歩道であるとされている。
- (15) 文献12
- (16) 文献13
- (17) 文献14, p. 80
- (18) 文献15, p. 306
- (19) 文献16, p. 1
- (20) 文献17, p. 11

【引用・参考文献】

- 1) 横内憲久 ウォーターフロント計画研究会編：ウォーターフロントの計画ノート、共立出版、1994. 11
- 2) 上島謙司、篠原隆：伝統的な水辺のアースデザインの型とデザイン刷新に関する研究、土木計画学会、論文集No. 8, pp. 249~256, 1990. 11
- 3) 山本和人、下村彰男：明治期から戦前にかけてのプロムナードの系譜と空間環境、造園雑誌第54巻第5号, pp. 353~358, 1991. 3
- 4) 中村良夫、岡田一夫、吉村敏彦：河川公園における人の動きのパターン分析とその河川設計への応用、土木計画学会、論文集No. 5, pp. 115~122, 1987. 11
- 5) 清水浩三郎、木村一裕、藤田勝：河川公園における滞在時間の影響要因に関する研究、日本都市計画学会学術研究論文集No. 30, pp. 307~312, 1995. 11
- 6) 伊藤隆、長谷川智也、清水繁、武田裕：河川風景主観からみた河川環境空間と景観設計手法、土木計画学会、論文集No. 5, pp. 107~114, 1987. 11
- 7) 上島謙司、斎藤順、加藤寛：水辺のプロムナードの付帯デザインに関する研究-イギリスとフランスの事例を中心として、造園学雑誌No. 703, 1991. 3
- 8) 日本造園学会編：建築・都市計画のための調査・分析方法、井上豊隆、1987. 4
- 9) 地球の歩き方、編集部編：地球の歩き方③フランス、ダイヤモンド・ビックス社、1985. 11
- 10) 日本造園学会編：建築用語辞典、岩波書店、1993. 12
- 11) 土木学会編：土木用語辞典、技芸堂出版、1999. 2
- 12) 工代博幸、渡辺介：ニース、カンヌにみるリゾート都市の発展過程、都市計画162, pp. 27~31, 1990. 1
- 13) 工代博幸：ブライトン、ニース、カンヌにおけるリゾート都市の発展過程に関する研究、東京工業大学社会工学部単位・学士論文掲載集No. 19, pp. 78~81, 1988. 3
- 14) 横内憲久編：鉄道でゆくフランスの町、グラフィック社、1998. 2
- 15) 佐藤真子編：ワールドガイドヨーロッパ⑨フランス、JTB、2000. 9
- 16) 景観デザイン研究会：人工環境の景観デザイン(その2)、景観デザイン研究会、1999. 8
- 17) 国谷山弘編：海リゾートの発展と変遷、綜合ユニコム、1987. 11

竹本圭介**・横内憲久***・岡田智秀***

わが国のウォーターフロント開発では、生活環境の質的向上を図るべく、線形の歩行者空間を創出する整備が進められている。本研究では、この歩行者空間の高質化を図るべく、高質な歩行空間とされる西欧のプロムナード等を規範としたわが国のウォーターフロントプロムナードの空間形態を明らかにすることを目的とし、わが国の歩行者空間を行動観察調査から、西欧のプロムナードの空間特性を文献調査よりそれぞれ把握した。その結果、規範とすべき西欧のプロムナードの特性を捉え、わが国のウォーターフロントプロムナードの空間形態として、望ましい空間状況と付与すべき空間的意味を明らかにした。

A Study on a Construction of Space Form of Waterfront promenade *

By Keisuke TAKEMOTO**・Norihisa YOKOUCHI***・Tomohide OKADA***

This research is designed to find arrangements for quality improvement of pedestrian space in Japanese waterfronts. In the course of this research, therefore, pedestrian space in Japan, and space characteristics of West European promenades, were grasped, through action observation/research, as well as a literature search. Through comparing such research results, requirements for building up waterfront promenades in Japan were identified.